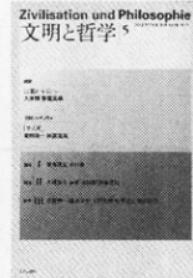


スボット

日本文化研究所編
文明と哲学5



あるから、なし得ることは限られている。しかし松明は小さくとも、照らす方向は大局を示すということは可能であろう。近代哲学の底流意識を新たに汲んで、「文明と哲学」を本誌の表題に掲げる次第である。

この志を引き継ぎ、本号も読み応えのある企画がラインナップされている。巻頭は、岡本道雄が最後の入院生活中に書き残した約四万三千字の論文から、最初の部分、とくにヴァイツゼマに掲げ、その活動成果を発表する場所として年報に掲載された。「文明と科学」が創刊され、本号は通算5号目となる。「発刊のことば」として岡本道雄（京都大学名誉教授）は、日本の近代哲学の歴史を踏まえながら、次のように書き記した。

「西洋哲学との対話のもとでこれを自己化し、哲学・医学・法学といった諸分野で、独自の思想奮闘を発信することを意図している。ドイツとの学術交流がその支柱をなすことは、もちろんである。小さな研究所で

宗教哲学というようなものがあることも知らないで、何となく入ってみたら西谷（啓治）先生がおられたと聞きました。そこで、これは不思議な縁です。もし西谷先生がおられなかつたら、僕はダメだつたと思います」

話は、大峯の師である西谷啓治が訳した「人間的自由の本質」の著者シェリンの部分、とくにヴァイツゼルの『パトゾフィー』に関する部分を、編集委員の木村敏氏が編集した論文。木村氏が「岡本道雄先生のご靈前に捧げる」が合わせて収録されている。

これにつづく大峯顯・秋富克哉の対談「言葉の宇宙へ」も50頁近くにも及ぶもので、興味深い。大峯は自身が哲学を学びはじめた頃然」の中の「反自然」「、自然」の意義について、秋富高田篤「ケルゼンの民主制論の意義について」、秋富克哉「アンティゴネー」の合唱歌をめぐる一試論」といった論考、公開シンポジウム「生と死の記録（驚田清一・秋富克哉）など。

65円・こぶし書房)
(A5判・260頁・13